



©Makoto Kamiya



第209回定期演奏会「新しい音世界」

2025年2月23日(日) 13:45開場 14:30開演 [14:10~指揮者プレトーク]

愛知県芸術劇場 コンサートホール

指揮/角田鋼亮(音楽監督) ピアノ/奥田弦*

中瀬絢音:委嘱新作(世界初演)

ヒグドン:ブルー・カテドラル

ガーシュウィン(グローフェ編):ラプソディ・イン・ブルー*

ドヴォルザーク:交響曲第9番 ホ短調「新世界より」Op.95, B.178

マエストロ広上と共に、美と幻想のインパクトを存分に堪能いただいている本日……に続きまして、次回・第209回定期演奏会(2月23日)は、われらが音楽監督角田鋼亮の指揮で、《新しい音世界》をテーマにお楽しみいただきます。

ドヴォルザークの人気作《新世界より》をメインに据えたプログラムですが、今やクラシック作品の王道ともなったこの交響曲だけでなく、それこそ「音楽の新世界」に挑んだ、心おどらせる作品もカラフルにお届けいたしますので、ぜひお聴き逃しのないように。ジャズ・ピアノ界の若きスター・奥田弦さんご登場です!

◆若き人気ジャズ・ピアニストとのガーシュウィン!

奥田弦さんは幼い頃からジャズに惹かれ、少年期から演奏活動を開始。10歳で自作曲を含むCDを発表してデビューを飾るという天才肌のピアニストです。ライブやテレビ出演も数多く人気の奥田さん、オーケストラとの共演も重ねて好評を博しています。今回、セントラル愛知響との共演では、ジャズとクラシックを融合させて「新しい音世界」を切り拓いた傑作《ラプソディ・イン・ブルー》のピアノ独奏を披露してくださいませ。

この人気作のタイトル、仮に訳せば《青の狂詩曲》といったところですが、アメリカの作曲家ジョージ・ガーシュウィン(1898~1937)の出世作です。ニューヨークはブルックリン生まれの彼は、15歳でピアニストとして活動を開始。ヒットソング作曲家への道を歩み始めた頃、ジャズとクラシック音楽を融合した新しいタイプのコンサートにむけて、前例のない「ジャズによるピアノ協奏曲を」と新曲を委嘱されます。これが、黒人と白人それぞれが培ってきた音楽を融合する、新たな(シンフォニック・ジャズ)の創生でした。

ガーシュウィンいわく「アメリカの音楽的なカレイドスコープ(万華鏡)」のように着想されたこの曲、曲中に登場するさまざまなテーマも、ブルースの音階やラグタイムのリズムなど、ジャズの源流にもなった音楽の要素が盛り込まれて、西欧のクラシック音楽とはかなり異なった音世界を創り出します。大活躍する独奏ピアノはジャズ・ピアニストが担当することも多く、人によってはかなり大胆なアドリブを加えることもあります。さて今回は?

余談ながら、《ラプソディ・イン・ブルー》ははじめ《アメリカ狂詩曲(アメリカン・ラプソディ)》というタイトルだったとか。ところが、作詞家の兄アイラが、ふと目にした画家ホイッスラー(《黒と金色の夜想曲(Nocturne in Black and Gold)》など音楽的な題が多い)の絵画から「《青の狂詩曲(Rhapsody in Blue)》は?」と思いついて、現在のタイトルになったそうです。作品について詳しくご興味あるかたは、David Schiff "Gershwin: Rhapsody in Blue (Cambridge Music Handbooks)" [Cambridge University Press, 1997] がお勧めです。

◆「新しい音世界」の美しさ ——アメリカと日本、感性の最先端へ

アメリカでは(も!)、ガーシュウィン以降もさまざまな「新しい音世界」への挑戦が生まれています。次回定期では、最近のアメリカで大人気のオーケストラ作品——色彩も澄んで美しく、その歌とサウンドがずっと胸の奥に沁みてゆく《ブルー・カテドラル(青の大聖堂)》(2000年初演)もお聴きいただけます。「ブルー」繋がりですね。

作曲はジェニファー・ヒグドン(1962~)。カラフルな管弦楽法を駆使したオーケストラ曲や協奏曲の数々を発表、明快なリズムと歌心を軸に、自在で複雑なサウンドを濃く広げてゆく作風で広く愛されています。彼女の代表作でもある《ブルー・カテドラル》も、全米で何百回となく再演され続けているのがよく分かる名曲です。

——作曲者いわく「ブルー」はあらゆる可能性が広がる空の青でもあり、「カテドラル(大聖堂)」は精神と成長の場でもあり、現世からさらに扉をひらく場でもあり……。この曲を書いているときに彼女は「空に浮かぶガラスの大聖堂」を想像していたといいます。「大聖堂の透明な壁の向こうから、雲や空の青が内に広がってゆく」神秘的なイメージ。クリスタルの柱が並ぶ回廊、ステンドグラスに描かれた人物が天上の歌をうたい、上昇を続ける旅は魂の恍惚へ。

作曲家の亡くなった弟アンドリュー・ブルー・ヒグドンがクラリネットを吹いていた人なので、曲の後半ではフルート(作曲家の吹く楽器)とクラリネットの対話が静かに聞こえます。ひとり残るソロ、その余韻……。

余談ながら、弟は生前ポルティモアのカタドラル大通りに住んでいたそうで、曲のイメージには極めて私的な思い出も織り込まれているとか。作曲家と作品については、数々のCD録音をはじめ、Christina L. Reitz "Jennifer Higdon : Composing in Color" [McFarland, 2018] という本も刊行されていますので、ご興味あるかたは。

さらに——「新しい音世界」の最先端、生まれたての音楽がこの世で初めて響く瞬間、にもぜひ立ち会って下さい。次回定期では、東京藝術大学大学院を経て、パリ国立高等音楽院で研鑽を積まれている若き作曲家・中瀬純音さんのオーケストラ新作を世界初演いたします。

中瀬さんは愛知県出身。マエストロ角田がかつて教えたこともあるというご縁もあるそうですが、2021年のオーケストラ作品《コーラ(非)都市的音響空間》は、マエストロ角田も藝大フィルによる初演を聴いて絶賛の言葉を残していますし、同年の室内楽曲《インヴェジブル・ライツ》《かはたれどきのうた》など各地での作品演奏が新鋭の登場を印象づけているところ。今回の新作も、セントラル愛知響が新天地・愛知県芸術劇場コンサートホールに拠点を移した新シーズンのしめくりにふさわしい贈り物となりましょう。

◆新世界より／新世界へ！

中瀬作品にヒグドン、ガーシュウィンと「新しい音世界」をお楽しみいただくプログラム前半に続きまして、次回定期の後半はそのものずばり「新世界」。クラシックの定番《新世界交響曲》をお楽しみいただきます。

正確には交響曲 第9番 短調《新世界より》というタイトルで、この「より」の2文字が重要になるわけですが、チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)が、遙か大西洋の向こう・新興国アメリカから音楽院の院長として招かれていた間に書かれたゆえに「より」となった次第。

当時のアメリカは新興国でした。西洋クラシック音楽の分野では、ヨーロッパから一流の演奏家たちが続々と来演することで、コンサート文化も盛んになっていました。富裕な資本家たちが莫大な投資をおこない、立派なオペラハウスが建てられ、新たにオーケストラもたちあがります。

そんななか、「新世界」アメリカの音楽文化を支える人材を育成しようと設立された音楽院に、ドヴォルザークが院長として招聘されたのでした。

学生たちを熱心に教えながら、創作にも励んだ彼は、アメリカのスピリチュアル(黒人霊歌)と故国の民謡とが不思議に似ていることに惹かれます。《新世界より》にもそんな研究の成果が反映され、チェコへの郷愁が掘り起こした豊かな語法に、アメリカ音楽の感性が出逢って熱く昇華されたのでした。

この曲の第2楽章は、日本でも《家路》という歌に編曲されて昔から有名ですが、この楽章と次の第3楽章はもともと、アメリカの詩人ロングフェローが先住民族の英雄を主人公にして書いた、野趣あふれる叙事詩『ハイアワサの歌』から靈感を得て書かれたとされています。

もともとドヴォルザークはこの叙事詩をもとにオペラを書こうとしていたらしく、その素材をこちらの交響曲に反映させることになったようです。交響曲を聴くにあたって『ハイアワサの歌』を知る必要はありませんが(この叙事詩は、三宅一郎訳が美しい装丁で出版されています[作品社、1993年])、ドヴォルザークが夢想を広げた世界観も、叙事詩を読んでみると得心することも多々。第2楽章の冒頭で響く神秘的な和音も、いわゆる「昔むかし……」と伝説を語り始める役割を果たしている、という捉えかたもできましようか。

ご興味あるかたは(以前もご紹介しましたが)、Michael B. Beckerman "New Worlds of Dvorak : Serching in America for the Composer's Inner Life" [W.W. Norton, 2003] がお勧めですし、その著者ベッカーマンが、《新世界より》などドヴォルザークの音楽と『ハイアワサの歌』を組み合わせ、作曲家が構想していた作品を(朗読と音楽で)再現してみせた試みも「Dvorak and America」というCDアルバムになっています[Naxos 8.559777]。

セントラル愛知響は、レオシュ・スワロフスキー名誉音楽監督と共にドヴォルザーク作品の演奏を重ね、チェコに蓄積されてきた大事な演奏伝統を染みこませてきました。そして今、角田鋼亮音楽監督とのシーズン1年目を終えるにあたって、この大切なレパートリーを取り上げます。そこに響く「新しい音世界」に、どうぞご期待下さい。次回もこのホールでお会いいたしましょう！

やまの たけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、歌詞対訳など多数。朝日カルチャーセンター新宿教室でバレエ音楽講座を開講中。

Profile

